

れき 民  
となん歴民だより vol.11

Morioka tonan history and folklore museum

平成19年6月26日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228

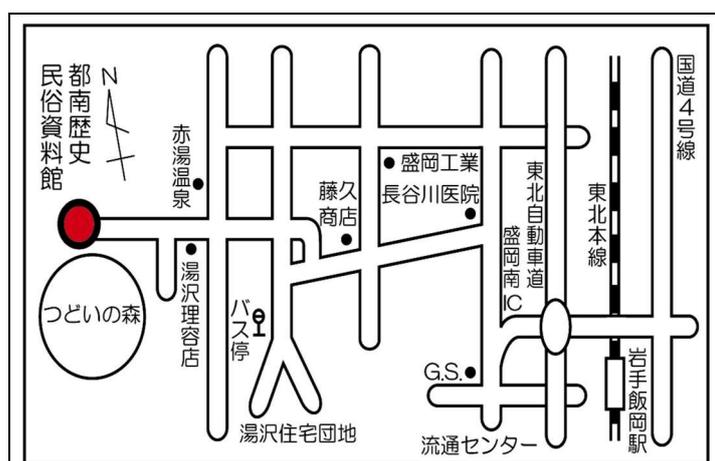


市民参加展「北東北のこけし展」

— もくじ —

- ・ 北東北のこけし展報告
- ・ <寄稿>キナキナボッコ考
- ・ 玉山歴史民俗資料館紹介
- ・ 指定文化財紹介①
- ・ 資料は語る①
- ・ となんの昔ばなし①

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から  
午後4時まで
- 入館料 無 料
- 休館日 月曜日  
(休日に当たるときは、  
直近の平日)  
年末年始

当館では、昨年度から、市民参加展として市民の皆さまのコレクションや研究を紹介しています。今回の「北東北のこけし展」は鎌田 隆さん（盛岡市天神町）のコレクションで4月25日から5月27日まで紹介しました。

こけしは、東北地方特有の木地玩具で、私たちには馴染みもあり懐かしい玩具です。東北地方のこけしは、現在10系統に分類されていますが、北東北には、秋田県の木地山系、青森県の津軽系、岩手県の南部系の3系統だけです。系統が少ない分、こけし工人の自由な創意工夫の余地が大きく、作者の雰囲気がよく伝わってきます。

今回の展示会では、北東北のこけし工人59人の作品134点を紹介しました。県内外から見学者が訪れ、大盛況でした。

## ＜寄稿＞キナキナボッコ考

泉山 恵一

（盛岡市前九年二丁目）



左：佐藤誠作（ビンロウジ頭）  
右：煤孫実太郎作

今回は、南部系のキナキナボッコについて研究している泉山恵一氏から、キナキナボッコについて寄稿いただきました。

こけしの産地は、木地挽きの中でも東北地方に限られているようです。しかも、南部系（花巻系）と言われるものは、キナキナ坊とかキナキナボッコと呼ばれ、オシャブリ・カタカタから出発したようです。このキナキナ坊は、はじめの頃は頭にビンロウジュ<注>の実を使い、高さも10cm前後で赤ちゃんが手に握って口に入れることができる程度の大きさであったようです。

松田清次郎が初めの頃作ったキナ坊は、頭部にビンロウジを用いたと言われていますが、南国育ちのビンロウジは東北では、なかなか入手できないものでした。どうしてビンロウジの頭にしたのでしょうか。木地師であれば、キナキナ坊の頭部は、丸く挽いて付けた方が早く簡単にできるのに、わざわざビンロウジに穴をあけ木を押し込みそれを本体に入れるというふうに手が込む方法を探っています。これはビンロウジの薬効を考えたからに他なりません。しかし、ビンロウジの薬効は、地方に住む、一木地師が考え出したとは考えにくいところがあります。

明治24年に煤孫茂吉（14才の時）が松田清次郎の弟子にはいるわけですが、それ以前の11才の時、台の鎌田千代吉について立木技術を習得しキナキナまで修行したという記録から考えますと、ビンロウジ頭のキナキナ坊は、どうやら煤孫茂吉から松田清次郎に伝わったと考えるのが自然のようです。

ここに登場する鎌田千代吉という人物は、台の天狗と呼ばれる羽黒の修験道を修めた鎌田甚兵衛の子で、慶応元年6才のとき、父の仲間である一之関、山の目の清六天狗に連れ去られ諸国を遍歴した後、20才で台に戻っています。この間に、修験道をはじめ鍛冶屋、石工、木地師などの技術を会得し、台では傷寒（腸チフス）を祈禱によりなおしたり、木地を挽いて土産品として売ったりしていたようです。鎌田千代吉が諸国遍歴の時、ビンロウジの薬効を知りキナ坊の頭にしたと考えても決して不自然ではありません。

乳児期の発達で赤ちゃんが物を口に入れて確かめる時期があります。以前、大阪でオシャブリをのどにつまらせ死亡した赤ちゃんがいて、この事件以後オモチャ業界では、赤ちゃんの口にスポッとはいるようなオシャブリの製造をやめました。今の赤ちゃんたちは、口に入れたくてもはいらないオシャブリでイライラしています。昔からこの地にあった赤ちゃんのオシャブリであるキナキナ坊、今こそ見なおされる機会かもしれません。

＜注＞ ビンロウジ（檳榔子）

ビンロウジュの種子で多量のタンニンを含み、アルカロイドやアレコリンなど含有するので、条虫駆除、下痢、皮ふ病、頭痛などに用いる。  
（日本大百科全書より）

# —盛岡市玉山歴史民俗資料館紹介—



資料館外観

## 資料館の成り立ち

教育の一環として巻堀小学校の児童、地区民が収集した土器・石器、民具など多数の資料が巻堀小の郷土資料室に展示されていましたが、創立百周年の記念事業として文化遺産を永く保存活用するため、別棟の記念資料館建設計画が進められました。この計画はやがて旧玉山村の郷土資料館としての計画に発展し、寄付金や敷地提供などの地元協力に呼応した旧玉山村の熱意は県、文化庁の認めるところになり、それぞれの助成のもとに玉山村歴史民俗資料館ができました。現在では旧玉山村と盛岡市との合併に伴い、盛岡市玉山歴史民俗資料館になっています。

- ・開館時間：午前9時～午後4時（見学には事前に予約が必要です。）
- ・休館日：毎週月曜日（祝日のときは翌日）、年末年始
- ・入館料：無料
- ・所在地：盛岡市玉山区巻堀字巻堀 33-2
- ・お問合せ先：済民文化会館（019-683-3526）
- ・主な所蔵資料：考古資料、歴史資料、民俗資料



資料館展示室

参考・引用資料／玉山歴史民俗資料館パンフレット



## 盛岡市所在指定文化財紹介①

### 市指定無形文化財（古武道）

しょうりゅう やわら むへんりゅう  
**諸賞流「和」・無辺流「棒術」**

昭和54年（1979）8月1日指定 盛岡市

盛岡藩においては武術各流派が隆盛をきわめ、藩内に伝承された古武道は60余流派に及んだといわれます。しかし、明治維新後に、そのほとんどが急速に衰微してしまいました。そうした衰勢の中にあつて、今日もなおその秘術を伝承しているのが諸賞流「和（やわら）」及び無辺流「棒術」です。

諸賞流「和」は、その起源が古く、初めは孤伝流（こでんりゅう）、ついで観世流（かんぜりゅう）、つぎに諸賞流と称せられ、盛岡藩には近世初期に岡武兵衛庸重（おかたけべえつねしげ）によって伝えられました。それは、実践のあらゆる場合を想定した非常に激しい武術で盛岡藩御留流として藩外への伝承を禁ぜられたといわれています。

無辺流「棒術」は、近世初期に斎藤亦右衛門勝久（さいとうまたえもんかつひさ）によって伝えられ、これもまたきわめて実践的な武術といわれています。

諸賞流「和」は「別伝縄術」を、無辺流「棒術」は「長刀術」をそれぞれ加え、盛岡藩以来の古武道の面目を今日に継承しています。

参考資料／盛岡市教育委員会 「盛岡の文化財」 1997

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します



千歯扱き

この農機具（写真左）の名前は千歯扱きといい、脱穀を行う道具です。脱穀とは穀物の粒を穂から取り離したり、もみがらを粒から取り去る作業のことをいいます。鉄片を櫛（くし）の歯のように並べ、稲穂をひっかけてもみをしごき落とします。江戸時代の元禄年間（1688～1703）に考案されました。

大正時代の頃、千歯扱きの生産は頂点に達し、鳥取県の倉吉では一年間に10万挺も生産されました。日本海を船で秋田方面に運び山を越えて当地方に普及したといわれています。最初の頃の歯は竹で、しだいに鉄の歯が用いられるようになりました。更に湾曲の形に進歩していきます。

ちなみに、千歯扱きが普及する以前は二股になった自然木を利用したまとり（写真左下）や、鉄で作られたからはし（写真右下）といった道具が使われていたため、脱穀に時間がかかりました。千歯扱きが普及した意義はとても大きいといえます。



まとり



からはし

## 参考・引用資料

田原虎次「稲作における農機具の変遷」

農林水産技術会議事務局 1990

となんの昔ばなし⑪  
『畑沼（はたけぬま）』

昔 三本柳に畑沼という深い沼がありました。湧水がゆたかで、水田をうるおしていました。昔から「ここには主がいるので決して水泳などしてはならぬ」と、老人たちは子どもたちに教えていました。その約束を破って、泳いだものは必ず主に引きずり込まれて死ぬということが今まで何度もあったからです。

この沼には大きな鯉がときどき、水面に姿をあらわすことがありましたが、釣糸にはどうしてもかかりませんでした。そこで沼から水をかき出し、水を減らして鯉をつかまえようと考え、水かきをしました。ですが、どうしてもかき出すことができずに、途中で止めたことも何度かありました。

ある時、若者たちが水かきをしていましたが、夕暮までかかっても水量が少ししか減りません。夜通しやろうというので、一生懸命になっていきましたが、真夜中に赤い衣服をまとった怪僧が突然水上に現われ、大声で言いました。「汝等（おまえたち）の命はもらったぞ」、怪僧はたちまちのうちに消えていなくなりました。若者たちは恐ろしくてたまらず、水かき道具もそのままにし、逃げ帰ってしまいました。

その後、沼の上に長い木のような物が現れるようになり、それを目撃した人は、三年以内に必ず死んだと伝えられています。戦争が激しかった頃、米の増産のために埋められ、現在では水田になっています。（終）

■ 出典『となんの民話』

（都南歴史民俗資料館）